

8 初年次における歯科衛生過程に基づく歯科保健指導の教育効果

○本間和代

明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords : 初年次教育, 歯科衛生過程, 教育効果

はじめに

歯科衛生士業務に必要な「歯科衛生過程」の概念を理解させるための初年次教育の試みについて、本学会第12回学術大会において報告した。平成25年8月（夏期休暇）の取組みから6か月の期間を経て、26年3月（春期休暇）にその教育効果と歯科衛生士を目指した学習意欲の向上を知ることがを目的に、同一協力者（家族）を対象に歯科衛生過程に基づく歯科保健指導の取組みを再度試みたので報告する。

対象および方法

対象：本学歯科衛生士学科1年47名（対象家族を変更した者を除く）である。

方法：春期休暇中に、初回と同一の家族に対し、歯科衛生過程に基づく歯科保健指導を実施し、学生の各過程の取組みに対する変化や理解度および家族の受け止め方、口腔内問題点の改善状況等について調べた。

結果および考察

1. 歯科衛生アセスメントの変化

歯科衛生アセスメントにより抽出された口腔の問題点は図1に示す通り、1回目に多かった歯石沈着や歯垢・食渣、歯列不正が減少し、歯肉炎や歯の着色・沈着および歯磨き状態が増加した。これは、6か月間の学科目の進捗により、専門的知識・技術が多く身に付いたことから、歯周組織の健康度や歯の審美性にも着目できたものと思われる。

2. 歯科衛生過程の理解度の変化

歯科衛生過程の理解度については、1回目は概ね理解した者が多かったが、2回目はかなり理解した者が増加し、目的達成に近づけたことが伺える。初年次には難しい課題であっても、講義だけでなく実際に反復体験させることによって理解を深めること

ができたと考えられる。

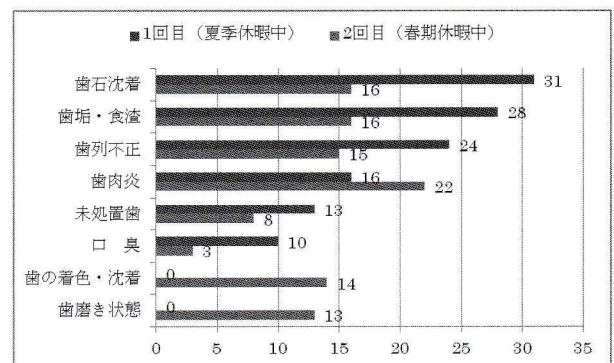


図1 アセスメントで抽出された口腔の問題点の変化

3. 学生および協力家族の変化

歯科衛生介入で最も多くの学生が取組んだブラッシング指導は、初回に比較しさまざまな工夫がなされた。このことは、家族の口腔環境改善に学生が学んだことを活かし、真剣に取り組んだ結果と言えよう。また、殆どの家族は前回以上に協力的で、自らの口腔に関心をもって取組んだ。6か月後の再実施は学生や家族のやる気が起きないのではないかと予想したが、その意に反し、非常に多くの学びと効果がみられた。

まとめ

6か月間の学習成果に基づく歯科保健指導を通して、歯科衛生過程の概念に基づく業務の遂行手法を習得し、家族も学生の取組みに理解と協力を示し、歯科衛生士教育の一端を理解するのに役だった。また、家族を対象とした本取組みは、良好な家族関係構築の一助に繋がったと思われる。